

「胡同」はどのように漢語の中に取り込まれていったのか

2001251004 伊藤佳奈子

1. はじめに

「胡同」はもともと古くから漢語の中に存在した単語ではなく、モンゴル語で「井戸」を意味する語から借用され、それが漢語の中で「路地」という意味を持つようになったとされる。「井戸」はモンゴル文語で *qudduγ*、内蒙古正藍旗の方言で [*xudag*] である。この「胡同」がいつ頃からどのようにしてできたのか。各時代に刊行された字書・韻書、それ以外の文献資料により考えてみた。

2. 「胡同」の誕生

胡同は北京城ができた元の時代に誕生し、漢語として「路地」という意味を持ち使用されていたことが文献から確認できる。しかし、元の時代には、現在使われている「胡同」という表記やそれ以前正式な表記として使われていた「衚衕」はみられない。その代わりに、元の時代の文献には「胡洞」(注1)「湖洞」(注2)「衕通」(注3)などいくつかの表記がみられる。もっとも、文献中で比較的多くみられる「胡洞」「湖洞」という表記も、字書の中に二音節単語として載っているわけではない。

複数の表記がみられ表記が安定していない点から判断すると、漢語以外の借用語であった可能性が高い。モンゴル語の発音と類似している点からみてモンゴル語からの借用語と考えてもよいのであろうが、確かな根拠はない。

3. 「衕衕」という表記の発生

以下では、「胡同」がどのように単語化されたのかを述べる。

元代には表記は複数みられたが、明の時代に入ると「衕衕」という表記が誕生することによって、まとまりをみせていく。この「衕衕」という表記がいつできたのかについては、張清常氏の先行研究(注4)によると1560年の『京師五城坊巷衕衕』に文献では初めて「衕衕」という二音節単語が確認できるため16世紀後半だということになっている。しかし、今回、各時代に刊行された字書・韻書中の「衕」「衕」の存否、注釈を調査することにより(調査結果の詳細は付録『字書・韻書の「衕衕」の形態素「衕」「衕」』を参照)、半世紀早い1517年の『四聲通解』で既に「衕衕」という表記が使われていたことが確認され、この表記が誕生したのは16世紀前半かそれより前だということがわかった。

「衕衕」の形態素「衕」の出現にも注目したい。「衕」は昔からあった文字ではなく、明の時代に入ってから出現した文字である。それが初めて字書中で確認されるのは『四聲通解』である。「衕」の出現と「衕衕」の出現が伴っていることからみて、「衕」という漢字

は「衚衕」のために生み出された文字なのであろう。それ以後も他の単語の形態素とはならず、「衚衕」専用として存在している。なお、元の時代の表記に使われた漢字は、表音の役目を果たすのみで、「路地」の意味は持たなかった。しかし、明代の「衚衕」には「行（ぎょうがまえ）」が付いており、表意の役目が付け加えられている。発音に関しては、この表記は元代の表記がもつ音をそのまま受け継いでいる。「衚衕」は表音、表意の役割を兼ねるべく新しく作り出された表記であり明代以降これが定着した。

4. なぜ「hu2tong4」なのか

「胡同」を文字が持つ四声に従って発音すれば「hu2」「tong2」（以下、発音はピンインで表記する。数字は四声の別）であり「同」は第二声である。しかし単語としては現在「hu2tong4」のように「同」は第四声で発音される。これはどうしたことであろうか。『老乞大』の各テキストや『語言自邇集』の音注をみると次のようになっている。

元末	『原本老乞大』	胡同（音注なし）
1517年	『翻訳老乞大』	衚衕 ㄏㄨˊ ㄊㄨㄥˊ
1670年	『老乞大諺解』	衚衕 ㄏㄨˊ ㄊㄨㄥˊ
1761年	『老乞大新釈』	衚衕（音注なし）
1795年	『重刊老乞大諺解』	衚衕 ㄏㄨˊ ㄊㄨㄥˊ
1867年	『語言自邇集』	衕 hu ² 衕 t ¹ ung ² , … Generally pronounced hu ² -t ¹ ung ⁴ -rh

「胡同」の「同」が例外的に第四声で発音されるのは、おそらくは元・明・清代以前の表記で「洞」や「衕」が使われ去声で発音されたことの名残であろう。「衕」に相当する声母も問題となる。ハングル表記によると「衕」を無声無気音で発音するのは遅くとも清代中ごろまで続いており、『語言自邇集』のローマ字表記によると清末には現在と同じく無声有気音の「hu2tong4」という発音になっていた。現在、北方の一部の地域で「hudong」のように無声無気音で発音するのは、以前の発音の影響が残っているからであろう。

「衕」が無気音から有気音へと変化した具体的な時期、および原因などについては今後の課題としたい。

注釈

- (注1) 『原本老乞大』、張可久（1280－1348頃）『双調折桂令酒分得卿字韻』『塞儿令・元夜即事』、楊式（元末）『南吕一枝花・贈素雲』、陳徳和（正没年不詳）『双調落梅風李塑擊鵝』等にみられる。
- (注2) 張可久『小桃紅・寄春谷王千戸』、至治新刊『全相平話三国志』等にみられる。
- (注3) 熊夢祥（元末）『析津志』にみられる。
- (注4) 詳細は張清常氏の「釋、胡同」（『語言学論文集』商務印書館1993年）を参照